沖縄戦から学ぶこと

―「少年護郷隊の碑」を訪ね、元護郷隊員の証言を伺い、『やんばるの少年兵「護郷隊」～陸軍中野学校と沖縄戦～』の講演を聴いて―

Ｙ・Ｓ（千葉市民）

『強制志願』は言語矛盾である。

『強制』は威力・権力で人の自由意思をおさえつけ無理にさせること。『志願』はこころざしねがうこと。ある事をのぞみ願い出ることである。文字通り真逆の意味を持つが、これ以外に表現しようがないと言われるのが、護郷隊志願の実体である。

「帰っても構わない。ただし1枚のハガキが届く。ハガキ1枚でこれだ！（首をはねる動作をした）」本人もいつ兵隊になったのかわからない。

大本営は沖縄に配属されていた第32軍が壊滅することは分かっていた。米軍占領下となる沖縄に陸軍中野学校出身者を潜伏させ、ゲリラ戦を展開させるために招集年齢にも達していない15～16歳の少年も『強制志願』という形で集めた。

現在の名護小学校の隣の旭が丘に、少年護郷隊之碑が建立されている。碑の背には護郷隊の歌の3番が刻まれている。『赤き心で断じてなせば　骨も砕けよ肉又散れよ　君に捧げて微笑む男児』メロディは陸軍中野学校歌「三三壮別の歌」と同じである。歌はマインドコントロールに使われる。

名護小学校では毎年6月に6年生に平和学習が行われる。講師が「君って誰ね？」と尋ねると「天皇」と答える生徒。「天皇のために死ねる？」と聞くと「嫌だー」となる。それが死ねるように作り変えられる。自分が死んでも、人が死んでも、人を殺しても何とも思わない精神構造に作り変えられていく。

「お互いに殴れ！」殴り合いの訓練が始まる。分隊長は地元の在郷軍人で、手加減をしたりすると、見本をみせるとばかりに容赦なく殴る。だれかが失敗すると連帯責任で何度でもやらされる。「声が小さい！」とほふく前進を2km～3kmやらされ血だらけになる。自分たちの手が痛くなるからと、皮ベルトで殴られる。もうどうなってもいい。それでも付いて行く、という心理状態に追い込まれた。

第2護郷隊は国頭村、大宜味村、東村の出身者が多く、当初は地元でゲリラ戦をさせる予定だった。森の中を熟知しているので都合が良かったからだが、第9師団が台湾へ移動になり、配置場所が恩納岳へ変更された。全然知らない山の中に放り込まれ、どれだけ心細かったことだろう。

悲しみもない、怒りもない、でもロボットでもない、淡々と動いて行く妄動。「上がって来る人はみんな撃った」と言う。「60発撃った」と武勇伝的に言う。「じゃあ、何人殺したの？」と聞くと言わない。はっきり覚えている。でも言えないのだ。

不都合な人は始末された。軍医に射殺された高江洲義英さん。両足がなく手りゅう弾を渡された大宜味朝一さん、分隊長にスパイと見なされ、タンガマ（炭焼き窯）の上に立たされ仲間に撃たれた屋比久松雄さん。

1945 年 6 月 9 日、国民皆兵の義勇兵役法が国会で議論されていた。「即ち一億をして真に皆兵に徹し、其の総力を結集して敵撃滅に邁進」させる。1945 年 6 月 23 日官報で国民に通達した。本来国が守るべき少年少女たちを、いつでも国の戦闘員となれるようにした。

「故郷を護る部隊」と書いて『護郷隊』。だが、護郷隊が故郷を守ることはなかった。生き残った人も苦しんだ。米軍が渡れないようにと壊した橋で、避難民は足止めされた。米軍が利用するから片っ端から家を焼けと命令され、何十か所も焼いた結果、戦後戻る家がなかった人もいる。殺してしまった同級生が同じ集落にいる人もいる。いきなり「天皇陛下万歳！」と叫んだり、刃物を振り回したりする PTSD に本人はもちろん、その家族も苦しんだ。

軍隊は人を守らない。そして基地のあるところに戦争はやって来る。

1945 年 4 月 1 日、米軍は沖縄の中部、読谷の縦 13km の海岸から 54 万 8 千人のうち 13 万人が上陸する。本土決戦のため沖縄を戦闘要塞化した。中・北飛行場を奪い取り、作り変えて沖縄南部を爆撃する。5 月中旬には九州の爆撃を始める。伊江島の飛行場は 4/21 に陥落している。基地は最初に狙われる。相手の攻撃を封じ、自分の攻撃を有利に展開するために。

だから、辺野古に新基地を作らせてはいけない。辺野古は普天間の代替ではない。岸壁に船着き場があり、核兵器も置ける弾薬庫がある新基地となる。

2016 年 3 月、与那国島にレーダー基地が配備され、石垣島では陸上自衛隊ミサイル基地の工事が進み、宮古島でも以前からある航空自衛隊基地に加えて、陸上自衛隊ミサイル部隊の配備が進んでいる。防衛省が保管庫だと地元住民を騙していたのは弾薬庫だった。ジェット燃料を保管するタンクの下は軟弱地盤である。2020 年の現在も、1945 年当時と何ら変わらない。時の権力者は変われども、民を守る発想など微塵もないのである。

アジア脅威論を煽り、武器を爆買いし、南西諸島を戦闘要塞化している政権は、私たちを脅威に晒している。

騙されてはいけない。あきらめてはいけない。
軍隊は人を守らない。そして基地のあるところに戦争はやって来る。
沖縄を再び「捨て石」にしてはならない。
今、私たちの選択と行動が問われている。

第 29 回歴史教育者協議会企画『知られざる沖縄戦史と瀬長亀次郎の足跡を訪ねる旅』
2018 年 12/25~12/28 に参加して